

第6回 千葉市発達障害者支援連絡協議会 議事要旨

I 日 時 平成24年11月27日（火） 13：30～15：00

II 会 場 千葉市総合保健医療センター4階 会議室

III 出席者

（委 員）杉田委員、碓氷委員、菊池委員、久保田委員、小池委員、谷口委員、
夏目委員、野口委員、石橋委員、鈴木委員、岡田（久）委員、
岡田（明）委員、高山委員 計13名

（代理出席）千葉氏（石渡委員代理出席）

（事務局）発達障害者支援センター：加瀬支援員、仲村支援員

障害者自立支援課：神津課長補佐、松田係長、

岩撫主任主事、峯島主任主事

千葉市療育センター：高橋事務局長、小林事務局長補佐

IV 配付資料

資料1 年度別実績報告一覧表（平成20年度～平成24年度）

資料2 支援件数の推移

資料3 平成23年度 相談概要

資料4 平成24年度 事業経過報告

V 議事概要

（1）平成23年度、事業報告について

事務局より、資料1～資料3に基づき説明し、質疑応答を行った。

（2）平成24年度、事業経過報告について

谷口委員より、資料4と併せて支援センターの活動を報告し、質疑応答を行った。

（3）千葉市の発達障害者支援について

谷口委員より、趣旨説明し、意見交換を行った。

（4）その他

□ 議事要旨の確定方法について

事務局より、議事要旨について、座長の承認・署名をもって確定・公開することを提案し、出席委員多数の賛同により承認を得た。

VI 会議経過 別紙2のとおり

【別紙1】第6回 千葉市発達障害者支援連絡協議会 会議経過

○ 事務局（加瀬）

～開会、資料確認等～

○ 神津課長補佐

皆様おはようございます。障害者自立支援課長補佐の神津でございます。本日は、お忙しい中、本連絡協議会にご出席頂きまして、誠にありがとうございます。

本来であれば課長の小出がご挨拶申し上げるところですが、あいにく議会中で席を外すわけにいかないということで、大変申し訳ございませんが代りまして私から一言ご挨拶申し上げたいと思います。

皆様におかれましては、日頃より本市の発達障害者支援の推進にあたりまして、多大なるご理解・ご協力をたまわっており、この場を借りまして、重ねて御礼申し上げます。

また、この連絡協議会は、発達障害者に対する総合的なサービスの在り方や、関係機関の連携体制の確立、また、関係機関が抱える処遇困難な問題ケースへの対応について専門的に協議する場として、平成20年7月に立ち上げたところです。今回が第6回目となっております、この間にも皆様から頂戴いたしましたご意見・ご提案に基づきまして、ライフステージにおいて一貫した支援を確立するための「ライフサポートファイル」の作成や、発達障害者支援センターの機能の強化ということでホームページを作成しまして、市民の皆様に相談しやすいセンターとなるよう取り組んできたところでございます。

また、前回の連絡協議会では発達障害者支援に関する方向性と発達障害者支援センターの役割について皆様から「提案書」という形で頂戴しております。この提案書に基づきまして、平成24年度も新たな取り組みを開始しております。これについては後程、センターから報告させて頂きたいと思いますが、委員の皆様にも、こういった取り組みをしているのかということも共有して頂いて、またそれぞれのお立場からご意見を頂戴できればと考えております。

むすびになりますが、本連絡協議会の委員の皆様のご意見・ご提案というものが本市の発達障害者支援施策の推進に必要不可欠であると常々考えております。本日も色々な面からご意見をたまわれればと考えておりますので、忌憚のないご意見をお願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが私のご挨拶とさせていただきます。

○ 事務局（加瀬）

～新委員紹介～

続きまして、次第の4議題に入らせていただきます。以降の進行は杉田座長にお願いいたします。

○ 杉田座長

それでは次第4議題に入らせていただきます。本日は15時頃を目安に閉会したいと思しますので、ご協力いただければと思います。

ではまず第一に『平成23年度、事業報告について』説明をお願いいたします。

○ 事務局（加瀬）

～資料1・資料2・資料3の説明～

○ 杉田座長

ありがとうございました。

ただいまの報告について、質問や意見はございますか？

○ 久保田委員

千葉発達障害児者親の会コスモの久保田です。親の会に所属しております会員の悩みで一番多いのが、知的障害がない場合に手帳がないと相談で止まってしまい、後は自分達で努力するしかないという現状です。手帳はどのような基準で取られているのか。

「大人になって就労し、おそらく支援が何もないとうまくいかず、精神的におかしくなっていて、病院にかかって、精神の手帳を取る」という二次障害で手帳を取る方法しか就労後の支援は得られないと会員は理解しています。

○ 杉田座長

大切な指摘だと思いますが、現状はどうですか。

○ 事務局（加瀬）

就労支援の現状でご報告をさせていただきます。実際に幼少期にわかった方の場合は療育手帳の取得がしやすいですが、大学等に進学され、IQの数値が知的障害域と出たとしても、現実的に適応できているということで療育手帳の取得がなかなか難しいという現状があるのだと思います。

精神障害者保健福祉手帳はアスペルガー症候群や広汎性発達障害などの診断でも取得ができるように法の改正で変わってきています。ただ、ずっと一般で来られて「自分は普通」という思いがご本人の中で根強くありますので、精神障害者保健福祉手帳をご本人達に理解して頂いて、取得するまでに1年以上かかるということが多分にあります。

実際には障害者雇用枠だけではなく、ハローワークの中に就職支援ナビゲーターと言って、コミュニケーションが苦手な方を対象にした34歳位まで相談できる窓口が設置されていますので、最初から障害者雇用枠だけではなく、一般の窓口も交えて相談しているというのが現状になります。

○ 杉田座長

他に何か追加があればお願いします。また、他にご意見ございませんか。

○ 碓氷委員

市立養護学校の碓氷と申します。発達障害については、職員研修なども行っています。「発達障害ではないか」という生徒に対し、「発達障害者支援センターに行ってみたら」と言い出せない。保護者も本人も障害ではないと自信を持っており、自尊心も強いので、名前が発達障害者支援センターでは学校としても勧められません。他の市町村には「人間関係に困っている」という表題で相談に行くことができる機関があるのですが、そこまで行くのは大変なので市内にあればと思っています。千葉市指定の相談支援事業所に向ける場合もあるのですが、それでよろしいのか、それとも他に今後作る見込みはあるのでしょうか。

○ 谷口委員

発達障害者支援センターの谷口と申します。今のお話ですが、確かに受け皿としましては地域の相談支援事業所などでご相談頂いている状況も多いかと思います。

やはり高校卒業を迎えて、自尊心が高く、なかなか発達障害者支援センターと名の付く所に抵抗のある方は多いと思います。ただ、支援センターの場合は発達障害の診断を受けた方は当然ですが、特性の認められる方、もしくは疑いのある方のご相談もお受けしています。中には発達障害者支援センターという文字を目にするだけでも抵抗のある方もいますので、そういう方には別の部屋で相談の対応をさせて頂くといったことも行っています。確かに保護者の方もご本人も自尊心といったところで難しいですが、一緒に考えていければと思っています。

○ 杉田座長

行政の方から何かありますか。

○ 神津課長補佐

現状では発達障害者支援センターが確定診断を受けている方も受けていない方も相談にのっております。確定診断のない方へは診断を受けられる所を案内していますが、障害受容には時間がかかってしまうことはあります。

例えば児童であれば教育センターや養護教育センターでワンクッションおくといったやり方もあろうかと思っています。関係機関としてある程度、親御さんにも受容を促し、センターの方に誘っていくなどの工夫で対応して頂ければと思います。

障害者相談支援事業所に行っても、センターと同じで障害者としての支援の中で対応していくことになろうかと思っています。「発達障害は精神障害ではない」というご意見を市民の皆さんからたくさん頂いていますので、個人的には発達障害者支援手帳ができたらいいなと思うのですが、国の方では手帳制度に積極的ではないようです。これは国の法律の枠組みの中で対応していくしかありません。

センターは最初、交通整理的な機関でと立ち上げてはいたのですが、交通整理だけでは不十分で、センター職員も一生懸命に1人の方に何度でも相談に応じながら、障害受容ができるようにと努力しているところです。その意味ではセンターが最初になるよりも早期に親御さんやお子さんにも障害受容してもらえるように教育センターや学校や養護教育センターにもご協力頂きながら、外の連携の中で少しずつ時間をかけて進めていければとは考えております。

○ 杉田座長

私もその通りだと思います。義務教育中までにある程度はそういった疑いのあるケースは、学校の中で少しずつ保護者や本人が受容できるような環境を作っていくのが将来的な解決策ではないかなと思っております。

他にいかがですか。

○ 菊池委員

お世話になります。自閉症協会の菊池と申します。センターがとても頑張って下さっていて、利用者の方がとても増えているとのこととても大変だと思います。ありがとうございます。

年齢層も多岐にわたり、障害種別もそれぞれで、発達障害とひとくくりに言っても皆それぞれに対応が違います。この資料を拝見していると、発達障害という言葉がとてもたくさん出てきますが、いまいち像が見えないというのを1つ感じました。

各区に療育の相談ができる所があって、個別に本人も親もアドバイスしてもらえれば利用者としてはありがたいです。その元締は支援センターなり療育センターが抑えて下さっていればと思います。少し交通整理をして、本人支援なのか機関支援なのか絞った方がよいのではないかと感じました。間口が広いのはありがたいですが、利用者もどこに相談していいのかわからないというのがあります。

知的障害がなく、普通に暮らしている人の中で仕事についてから見つかる例もとても多く、その方は発達障害の支援ではなく違うものを求めているのだらうと思います。そのニーズを確認した方がいいかと思います。職場の中でどうするかをクリアにしていくことが必要なので、そうすると機関支援の方がいいかと思います。

○ 谷口委員

ありがとうございます。支援センターだけで1人の方の相談をお受けしていく難しさはあり、それ自体が本来の責務とは言い切れないこともあります。前年度の連絡協議会でも個別支援から少しずつ地域で支えられるようにとの話があり、機関支援や地域での支援機能を高めていく方向にシフトしていくこと自体は必要だと思っています。我々も各関係機関や企業などと関係を持ちながらやっていければと考えています。

それぞれのニーズの違いもあると思います。「発達障害だから」ではなく、その方が望んでいることや生活状況に即した支援を一緒に考えていくことが大事だと思っています。成人の方の場合、ご本人とご家族で意見が違う場合もありますので、そこを

調整しながら、ご家族での共通理解や方向性を確認しながら1人1人の支援を考えて、これからもやっていきたくと思っています。

○ 菊池委員

具体的に機関支援にシフトしていくということですが、どんなことをされているのですか。どこを育てていっているのですか。

○ 谷口委員

この後、事業の説明等でも出てきますが、乳幼児の場合では各区にできるだけ拠点となるような支援体制を作っていければと考えています。具体的にはまだ青写真の段階ですが、保健センターや相談機関等で核となるような所をできるだけ作っていき、そのスタッフのサポートをしていければと考えております。

昨年度では連絡協議会の後に各保健センターの保健師50名前後集まって頂き、ペアレントトレーニングのセミナーを開催するなど、できるだけ地域に還元できるようにとは考えております。

○ 夏目委員

でい・さくさべの夏目です。私どもの法人はふらる（※障害者相談支援事業所）も運営しています。法人のスタートは知的障害の方からでした。法律が変わり三障害対象となり、次に発達障害等も広く相談を受けることになりました。職員達は日々、勉強していますが、本当に難しい状況です。

具体的な事例として、ある母親が中学生になるアスペルガー症候群の息子さんを連れてこられました。母親は十分に状況を認識はしていましたが、本人は「僕は障害者ではない」ということで、私立の高校に進学しました。やはりうまくいかず、すぐに退学になっています。

義務教育の範疇であれば、関係者が集まって支援を考えていきますが、義務教育以降の人達の支援というものはどこまで関係機関が携わっていけるのだろうか。当然、成長に伴って支援は移っていくと思いますが、それが継続的になっているかということそうではない。中学校までは手厚く支援チームが組まれますが、高校ではなかなか手厚い支援ができなくなっている現状もあります。

私も含めてここにいる皆さんは障害関係の方達かと思います。彼は普通校に行ったのですが、ここに普通校の方が1人もいない。将来にわたって彼らが生きやすくなるためには、例えば教育委員会や普通学校の関係者も含めて支援チームを作っていくことから変えていかなければならないのではないかと感じております。

○ 杉田座長

その通りだとは思いますが、それだけでは十年一日に終わってしまうと思います。例えば千葉大学でもアスペルガーの方は当然いるわけです。大学でも発達障害支援を始めたのですが、学生本人が自分でも認知していないことが多いわけです。そういう

中からやっていかざるを得ないというのがあります。トータルライフにやっていくというのはどこから手をつければいいのか難しいわけです。

明らかに問題のあるお子さんは早く見つかるわけですから、ADHD、自閉症とタイプは違いますが、方向性としては義務教育の中で早く見つけた方が支援もしやすいのは事実です。時代の流れとしては学校ないし学校前の段階で早くサポートの方策を考えていく、一生つないでいけるようなシステム作りをこの会議でも提案していければと思います。

他にいかがでしょうか。

○ 碓氷委員

ソーシャルスキルトレーニングを小・中学校の先生が受講して、身に付けて現場の学級でそのお子さん達と向かうことが必要です。トレーニングは書物を見てもわからない。実践的なトレーニングの研修を是非、千葉大でとお願いしたのですがなかなか難しいというお話を伺ってはいます。そういったことを医療と大学とでやっていけば、地域に根差したものができるのではないかと考えています。地道ですがやってこそ先生方も頑張ろうかなと気になると思います。

○ 杉田座長

養護教育センターからも何かコメントあればお願いします。

○ 高山委員

養護教育センターの高山です。研修も担当しており、研修を希望される通常学級の先生方のニーズがものすごく高まってきているというのは感じています。勉強したい気持ちはあるのですが、1人1人違うので、夏休みに1、2日研修しても深まらないということはありません。先生方に機運が高まっているところなので、是非このチャンスに研修という形で深めていけたらなと考えています。

養教としましては今年度、相談に来られたお子さんの様子を見に学校を訪問し、その時に先生方にアドバイスをしてくるという形の学校訪問を増やしています。実際に具体的な例がある方が理解しやすいという部分もあるので、様々な形で先生方に伝えていきたいと考えています。

○ 杉田座長

教員養成は非常に難しいもので、学校の先生は具体例を求めます。私も講師を何度かしていますが、どうしても発達障害の抽象的な核となる話しかできず、そこにネックがあるわけです。学校の先生には「経験して自分で試行錯誤してやってみてください」とよく言いますが、「私はわかりませんから」で終わってしまう。そこが大きな問題です。教員養成のために発達障害を必修化して、教員を出していかなければならないと思っていますが、それだけ教員養成システムは重要な問題になっています。

千葉大学内の予算により、地域支援を千葉市でやろうと思っています。発達障害の

支援を大学と千葉市でやっていこうと計画しております。これは谷口委員と相談しながらやっていければと思っています。

こころの健康センターからも一言、お願いいたします。

○ 岡田(久)委員

こころの健康センターの岡田と申します。少しそれますが、先日、国の研修でひきこもり支援についての研修に行ってきました。ひきこもりの方の3分の1の方が発達障害、3分の1の方が何かしらの治療が必要とされる精神障害、3分の1の方が思春期の発達過程における課題の挫折などの支援が必要な方だというデータがありました。

発達障害の方は小学校、中学校は何とか乗り越えてきたけれども高校生以降になって適応しきれなくなってきた。ただ小学校、中学校の時は支援がいらなかったのかという決してそうではなく、どこに支援を求めているのか、周りもどこに手を差し伸べていいかわからないような状況の中で埋もれてしまい、それがひきこもりという現象になってしまうという説明がありました。

全国的にも色々な協議会もできており、その中でどんな立ち位置としてやっていいかという話もいくつか出ました。あるケースに対して、色々な所が手を差し伸べてやってみて、こんなことがうまくいかなかったということを協議会やセンターに情報を集約して検討していくというやり方をすることが、今できる最善の方法なのではないかという話も出ました。

こころの健康センターでは精神保健福祉相談や来所で保健師、心理士、相談員が対応するのですが、発達障害というと今までは発達障害者支援センターにとパンフレットを渡していました。もう少し顔の見える連携、例えば電話を1本入れておくなど、一歩前に出た連携をしていくことが大事だということを学んできました。

○ 杉田座長

顔の見える連携ということで、療育センターを紹介する保健師に伝えてほしいのですが、ただ電話1本でなく発達の遅れの子などは紹介状を書いて頂き、我々から返事がいくようにしてもらいたいと思っています。顔の見える連携を是非お願いします。

最後にまた時間を取りますので、次に進みます。『平成24年度、事業経過報告』をお願いします。

○ 谷口委員

～資料4・の説明～

○ 杉田座長

ありがとうございました。何かご質問ありますか。

○ 菊池委員

ペアレント・トレーニングですが、実際に参加されている方の対象児童の年齢、障害種別、行動療法、具体的にどんな手法をメインとされているのか、教えてください。

○ 谷口委員

ありがとうございます。参加して頂いているお子さんの年齢は年長から小学校4年生のお子さんをお持ちの親御さんです。中には御兄弟がおられる方もいます。障害種別はADHDの診断を受けたお子さんの親御さんを対象にしています。

行動療法としてはいちばんベーシックなところだと思いますが、UCLAで開発されて、上林先生が持ち帰ってこられたものをベースにしたテキストブックを使わせて頂きながら、支援センターのスタッフで10回にわたって行っています。

○ 杉田座長

他にいかがですか。ないようですので次に移らせて頂きます。『千葉市の発達障害者支援について』をお願いします。

○ 谷口委員

今回、各委員の皆様の現場でも発達障害の方や保護者の方に対して色々な形で対応して頂いていると存じます。その取り組みの現状やお考え等をお聞かせ頂いて、発達障害の方の地域生活がより安心できるものになるようにと意見交換の場を設けさせて頂きました。時間が限られてはありますが、お願い致します。

○ 久保田委員

私の息子は小学校6年生で、年長の時に相談を勧められ、その時に提示されたのが療育センターと児童相談所でした。児童相談所に行きましたが、その時に選択肢が2つあったというのがよかったと思います。実際に児童相談所に行って色々支援して頂いて、無事に小学校にあがることもできました。小学校の先生との関わり方も学ぶことができ、児童相談所から養護教育センターへの移行もスムーズでした。本人は支援してもらっている感覚は全然なく、学校の先生にもよくして頂いています。

気にかかるのが千葉市発達障害者支援センターの名前についてです。設立する時点からコスモもお願いはしていましたが、千葉県のCASのように愛称をまず大きくのせて、正式名称を小さく書いてくれるとあたりがいいという気がいまだにしています。

場所も療育センターに設置することに大反対していました。やはり敷居が高すぎる、もっと気軽に行けるような所にしてほしいとの話だったのですが、その当時では「療育センターの鬼島先生との連携がうまくいくから」と押し切られた状態でした。今は鬼島先生もいっしょになくなってしまって、実際、療育センターと支援センターのつながりはどのようになっているかもよくわかりません。

○ 杉田座長

主に今まで発言されていない方をお願いします。最終的に提示された問題等に回答したいと思います。

○ 小池委員

障害者職業センターの小池と申します。お手元にリーフレットをお配りしてあります。お話をしておきたいことは2点あります。

1点はリーフレットの中にある「発達障害がある方へのサービス」についてです。これは発達障害のある方へ向けた職業準備支援の新しいサービスで、来年度の4月から始まります。従来、幕張の障害者職業総合センターで行っていましたが対人技能の訓練や障害の理解についての訓練を障害者職業センターでも8週間の準備支援の中で発達障害者に向けた講座として始まることになりました。実際は4月すぐに始まるわけではないですがお知らせいたします。

もう1つは障害者職業センターでも発達障害者の方の相談は年々増えております。一昨年は124名、昨年が130名と新規の方々が年々増えております。最近は高校生、専門学校生で就職を考えたいのだからどんな方法があるのだろうかという親御さん、先生、大学の学生支援課といった方々のニーズが非常に多くなっています。特徴はご本人抜きで、周りが困ってしまっているということです。ご本人は日常生活の中では困っているが困り感はない。その差をどのように埋めていくのかが支援の第一歩になっているところですね。幼い頃からの積み重ねの中にあるものなので、ある意味ではもう一度仕切り直しをし、修正をしていくという作業を行っているという実態があります。

私共のセンターでは毎年、推進フォーラムという地域に向けたイベントを行っています。12月にも行う予定でいます。発達障害の当事者の方、働いている方にお話をし、頂くということをご2年程しております。12月は定員を超えていますが、来年度以降もこのような形でイベントをしていくことになるかと思います。

障害者という名前がついていてもかまわないと言って頂けるのであれば、手帳の有無に関係なく支援をしておりますので、ご利用頂ければと思っております。

○ 鈴木委員

障害者相談センターの鈴木と申します。障害者相談センターは18歳以上の知的障害者への相談・判定を行っています。こちらに関連するとしたら知的障害を中心として、広汎性発達障害を二重診断として来る事例がけっこうあります。皆さんそれぞれ健診、保育、教育等で相当言われているかとは思いますが、親御さんは認識しておらず、障害者職業センター、発達障害者支援センターから紹介されて、就労のために仕方なく取りに来ます。

大学の学生相談室も全然関与していない、専門学校なり入れた方がいいが就職はないということもあります。高学歴で社会参加している中で、就職が困難な状況になると療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の取得を勧めていると思うのですが、なかなか難しい。療育手帳を取れる方はまだいいですが、その後、社会参加が伴うかという点と統

合失調症の併発、人格障害等で社会参加が難しくなってくるなどの問題点があると思います。

障害認識というのは言っているものではなく、本人達が危機的状況になってわかるものもあり、我々が一方的に発達障害ですと言っても聞く耳を持たない時期があるのではと、大人の方の立場である機関としては感じます。

○ 千葉氏（石渡委員代理出席）

千葉市役所保育運営課の千葉と申します。千葉市の保育所、保育園における発達障害児の受け入れについてお話しさせていただきます。平成22年度より発達障害児の職員配置が決まり、障害児保育の枠として位置付け統合保育を行っております。職員配置は概ね3対1というところです。

発達障害のお子さんに関しては、他の子ども達にその子が何で困っているのかということを理解させてあげることが難しいということがありますので、職員は体当たりで日々、関わっております。その中で困ったこと等を親御さんと密接に話をしながら、保健福祉センターや他の専門機関と話し合いをしながら進めていくという状況です。

職員の資質向上という面では障害児保育研究会というものが年に3回程ありまして、公立保育所、民間保育所、認可外保育所、幼稚園と研修会を行っております。その他に巡回指導というものがありまして、年3回位、各保育所の発達障害だけでなく他の障害も対象に状況を把握しながら適切なアドバイスを行うようにしています。

問題点というところでは親御さんとの関係性です。保育所の中で支援が必要ではないかなと思われるお子さんをどうやって支援につなげていくかというところで、やはり親御さんとの関係性がとても難しいです。年齢も小さく、本当に発達障害なのか、今までの経験が足りないだけなのか、なかなか判断しづらいという部分がありますので、この時期は慎重に携わらなければいけないなと感じております。どのようにしたら保護者と気持ちを一致できるかというところでの関係機関との連携が課題だと思っております。

○ 岡田(明) 委員

健康支援課母子保健係の岡田と申します。部署は母子保健の分野で妊娠期から出産・育児に関しての支援をしています。皆さんとの関係で言うと、乳幼児健診がいちばん関係あるかと思います。その中で発達障害など、色々な病気の早期発見ということで健診を行っていますが、平成になってから虐待が大きく問題になってきています。その中には育てにくいお子さんでお母さんが困ってしまい虐待に至る、死亡事例が出てしまうということがあり、母子保健の分野では力を入れているところです。

お子さんに障害があって育てにくいということであれば、早く見つけて療育につなげ、お母さんを楽しませてあげるといった方向の支援をしているところですが、なかなかうまくそのルートには乗っていかないところです。

最近は発達障害者支援センターと少し協力関係ができてきましたので、年中児行動

観察に一緒に行かせて頂いて、地域で支えるシステム作りをしていきたいと思っています。

○ 高山委員

養護教育センターで、最近、課題になっているのがあまり人に迷惑をかけないおとなしいタイプのお子さんが高年齢になるまで見過ごされているということです。高校受験の段階になって相談に来られ、あまりにも時間がなく、何で通級など色々な形で小さい時から支援できなかったのかと困ることが多いです。おとなしいタイプのお子さんにどういう手立てが取れるかということを常日頃考えているところです。

○ 岡田(久)委員

こころの健康センターでは一般市民の方に普及啓発事業や関係機関職員に対しての研修などの事業もあります。最近は発達障害のことを知りたい、ソーシャルスキルトレーニングのことを学びたいという希望がありまして、それに対応する形で講演会や研修会を行っています。

看板が精神障害者の方とついてはいるのですが、市政だよりなどでも広報していますので利用して頂けたらと思います。

○ 石橋委員

中央区高齢障害支援課の石橋と申します。今日、初めてこの会議に出席させて頂きました。この会議に出席となって、発達障害は遠い存在だという気持ちでした。私共は手帳をお持ちの方へサービスを提供するという業務を行っています。発達障害を持つお子さんで大宮学園を利用される方につきまして支給決定をするというような業務は行っていますが、それはごく一部であります。この席に出席致しまして、こういう悩みとかこういう状況があるということを少し認識させて頂きました。

○ 野口委員

千葉市の認可を受けている民間保育園協議会の野口と申します。先ほど千葉さんからお話がありましたが、公立と民間はすべて障害児を含め受けるということになっております。市からも加配を受けるようになっております。現状で言いますと保育士の配置がうまくできないといった理由でやれない園があると温度差があるかと思っております。

その他、研修を行ったりもしています。現場の保育士から専門的な勉強がしたいという要望がありますので、必ず年間に2回位は行っています。

私共の団体は、千葉市の指定管理者として、きぼーる6階で千葉市子育て支援館というものを運営しています。臨床発達心理士がおりまして、今は1週間に1回ですが早い時期に色々確認したいという親御さんの相談を受けています。相談しやすい雰囲気があり、相談室もあります。就学前を対象としておりますが、相談の場として来て頂くことが1つ提案できるかなと思っております。

○ 夏目委員

一点だけ、将来的にこの協議会が続くとすれば、普通級、普通学校の先生、関係者の参加は可能でしょうか。

○ 神津課長補佐

これまで市の養護学校が特別支援教育の中樞だということで、そちらから委員をということを考えていました。教育委員会との連携も密にするようにとの話もあり、普通学校の普通学級の先生、特別支援学級のない学校の先生の参加も可能でございますので検討させていただきます。

○ 杉田座長

他はよろしいですが、今までの質問、コメントがありましたが、谷口さんから何か回答をお願い致します。

○ 谷口委員

ありがとうございます。まず、久保田委員からお話ありました療育センターと発達障害者支援センターの連携ということですが、療育センターは診療所形態をとっており、主に就学前のお子さんにご利用頂いています。支援センターは相談機関なので、医療や療育が必要な場合には療育センターを外部機関として個人情報を守りながらご紹介し、連携しております。児童精神科の医者は今、不在です。

名前に抵抗があるということがありましたが、それは場所の提供で考えられるのではないかという話もありました。実際に保育所や幼稚園に行き、そこで親御さんにお会いするというのも行っております。個別の支援という形になりますが、保育所、幼稚園の先生にご理解頂いて、少しでも普段の親御さんのケアに役立てて頂けるような形にしています。

これからもご教授、ご協力たまわることになるかと思います。今回、こういう形でご発言頂いて、少しでも顔の見える支援を考えていける材料にもなったかと思います。

○ 杉田座長

座長として一点コメントさせていただきます。この会には行政も来て頂いていますので、是非まずお願いしたいのが、千葉市にある関係機関、資源を有効活用するマネジメントは行政でやらなければならないということです。もう少し有効にまわるように、何とかして頂きたい。それに必要な予算を是非、獲得して頂きたい。

ネーミングの問題は障害受容、啓蒙など色々あると思いますが、言葉狩りをし出すと中身がなくなりますので、啓蒙をもっと広げていかなければいけないと思います。

精神医学の診断体系自体も変わってきています。診断確定が難しい段階で、社会・精神医学的なところは、社会の人達に理解して頂く必要があります。医療機関に投げれば診断がすぐ返って来るとされているかもしれませんがそうではありません。虐待の問題は非常に大きいので、発達障害を早めに見つけてあげることは大切です。

統合保育の話がありましたが、保護者支援だけではなくて、千葉大の幼児教育の先生も関与している保育士のための支援策など活用できる資源、人材を有効に活用する観点からも是非お願いしたい。

困り感の問題は本人が状態をどこまで認識しているのか、誰がどうやって伝えていくかも問題です。困っている人は言って来ると思いますが、周囲の人だけが困っている場合は周囲が何とかアプローチしてやっていくしかない。支援は必要ですが、本人も含めてある程度は認識してもらう努力をしてもらわなければいけないのではないかと個人的には思います。そうして社会にある資源を活用して、本人もいいように生きていけるようにサポートをしていく。「全て私のためにみんなやってください」というのはどうかと思いますので、ある程度は周りの人達も努力して頂いて、何とかよりよいサポートにつなげて頂ければと思います。そのための努力は行政、福祉、医療、教育関係、色々な方達にこの会を通じて、この会をこれからも継続して頂きたいと思います。色々ご意見もありましたが、行政の方に伝えて頂ければと思います。

では以上でこの時間は終了したいと思います。事務局から何かありましたらお願い致します。

○ 事務局（加瀬）

はい、1点お知らせがございます。本日の議事録についてですが、杉田座長に内容を確認して頂いた上でご署名頂き、公開することとしてよろしいでしょうか。

（賛成多数）

ありがとうございます。事務局からは以上です。

それでは委員の皆様方、長時間にわたりご議論頂きありがとうございました。以上をもちまして、第6回千葉市発達障害者支援連絡協議会を終了させていただきます。

本日は大変お疲れ様でございました。